

2016 年 9 月 23 日

議案 1 号、平成 28 年度熊本県一般会計補正予算案について

日本共産党の山本伸裕です。議案 1 号、平成 28 年度熊本県一般会計補正予算案についておたずねします。議案には、立野ダム建設事業の負担金が計上されています。熊本地震発災後断続的に続く余震やその後の大雨により、立野ダム建設予定地付近は大規模な土砂崩落が続いており、景観が一変しています。そして今後もさらに崩落が広がることが懸念されます。いまはこれ以上被害が広がらないよう、防災対策に全力を尽くすことが優先であります。県の財政状況も非常に厳しくなるもとの、現実には工事を進められるような状況にない立野ダム建設のために約 8 億円もの負担金を出すことは適切でないと考えます。

5 月 24 日、衆議院総務委員会で、政府の地震調査委員会の白間竜一郎政府参考人が熊本地震について以下のように答弁しています。「一連の地震活動は、今回活動したと評価される区間の周辺の区間にも及んでおり、こういったことからこれらの断層帯について重点的な再調査を今年度から実施する予定にしているところでございます。」また宮内秀樹国土交通大臣政務官も、「今後有識者を交えました詳細な調査を行なうこととしております」と答弁しています。

ところが国土交通省は、国交省所管の研究機関関係者や穴あきダム建設推進の建設省OBの教授などで構成された技術委員会を組織し、驚くべきことに一回目の会合で早々と、ダム建設に問題はないとする九州地方整備局の説明を了承したのであります。今年度から重点的な再調査、詳細な調査を行なうとの政府答弁をないがしろにするものであります。

また、同じ国会答弁で越智政府参考人は、「亀裂が斜面崩壊によるものか地表に現れた断層ずれによるものかを見極めることは容易ではなく、航空写真や無人航空機の画像などでこれらを区別することは難しいと考えている」と答弁しています。熊本地震発災後、実際に行なわれた調査は文献調査、地形学的調査、現地調査のみであります。政府の地震調査研究推進本部の、活断層の調査方法によれば、はじめに空中写真を用いた地形調査。さらにその断層で過去どのように地震が発生したかをトレンチ調査によって調べる、そしてさらに、地表では活断層が認められない場所でも、地価構造調査により、トレンチ調査ではわからない地下深部の構造、断層に関する情報を得ることができるとしています。そこで知事、第一番目

の質問ですが、政府答弁からしても、立野ダム建設の安全性の結論を出すうえでトレンチ調査および地価構造調査を求める必要があると考えますがいかがですか。

9月10日毎日新聞は、九地整が模型実験を行った結果、ダムの放流孔は流木でふさがることはないと結論付けたものを、技術委員会がそのまま承認したことに対し、疑念を表明する専門家の声を紹介しています。さらに、本来はこうした議論をするのが第三者委員会のはずなのに、事業者が選んだメンバーで構成された技術委員会にダム建設に批判的な専門家は含まれず、本質的な議論は行なわれなかったと書いています。洪水時に万が一にでも放流孔がつかまれば大惨事につながりかねません。知事、もしこのままダムが作られ、ダムによる被害もたらされてしまったら誰が責任を取るのでしょうか。

知事は議案説明で、阿蘇くじゅう国立公園が国立公園満喫プロジェクトに選定されたことを報告されました。阿蘇の雄大な景観、自然、歴史と文化の魅力が世界にアピールされ、震災・観光復興の力になることを私も願います。同公園の中で風致景観の維持のため、土地の形状変更、工作物の設置、竹木の伐採など自然環境の改編を制限している特別保護区に設定されているのがダム建設予定地の左岸側に広がる北向谷原始林であります。ダム建設は大きな期待が寄せられている満喫プロジェクト選定結果に水をさしてしまうのではないのでしょうか。以上、知事にお尋ねします。

(知事答弁後)

知事は、国はレーザー測量など実施していると言われましたが、地質・活断層に関する詳細な調査は行われておりません。今回の地震で新たな活断層が発見されたこと、そして今後の活断層の動きについて注意し、観測と詳細な調査が必要だと、日本活断層学会の鈴木名古屋大学教授、阿蘇火山博物館学術顧問の須藤靖明さん、清水洋史九州大学教授など、多くの専門家が警鐘を鳴らしています。国交省、技術委員会はこうした専門家の意見に耳をふさいでいるのでしょうか。いっぽう林野庁は確かに航空レーザー計測を実施しました。そこではこう指摘しています。「多くの山腹崩壊等が発生しており、このほかにも地盤が脆弱になっているだけでなく、多くの亀裂や小崩壊が発生している」と。いっぽう国土交通省は、「地層の剥がれ落ちはあるが基礎岩盤は問題ない」と結論付けています。仮にダム自体は壊れないとしても、湛水域の土砂が崩落すれば大量の土砂、巨大な岩石、水分を含んだ枝葉のついた流木がダム湖に流れ込み、ダムの放流孔がつかまってしまうことが懸念されます。実際、豪

雨と土砂崩れにより工事事務所が流され工事用に取り付けていた橋は跡形もなく流され、重機も流されました。有明海にいたるまで大量の流木が流出しました。ダム湛水域だけで 100 万トンもの土砂が崩落しました。ところが国交省は、つまようじを流木に見立て、ダムの模型に流しただけで、ダムの穴は洪水時にもつまる事はありませんという結論を出しました。穴がつまるほどの巨大な岩は洪水の時にも動かないから大丈夫と結論付けました。こんな検証結果に誰が納得できるでしょうか。ところが技術委員会があっさりと納得・了承されたのであります。かつて満水時に発生した地滑りによって大量の土砂がダム湖に流れ込み、ダム津波が発生し、下流で約 2,000 人の死者を出したイタリア・バイオントダムの大惨事は決して他所事ではありません。人命最優先の立場に立つならば、技術委員会の結論をうのみにすることはできません。まずは科学的で公正な安全性に関する検証を求めること、そしてそれがはっきりするまではダム関連予算を凍結して震災復興に回すことを国に求めるべきだということを求めまして、質疑を終わります。